

を特殊な外科の一分野として位置づけていた。したがって、補整・矯正・義肢論は「欠損を補整する方法」として一章を成しているが、歯科口腔病関係の記述は、全三十章のうち十章にわたっている。その殆んどが、半ページもしくはそれ以下に過ぎない。

訳注者によれば、解剖を含めて歯科口腔病関係は、合せて七六一行、全集の約一〇ページ分、全体の一・二％であるという。このように夥しい活字群のなかに、星屑のように散った歯科口腔病を、高山氏は根気よく丹念に抽出して集めたのである。

その結果、A五判九〇ページの本著ができた。用語解説や時代背景など、丁寧な注釈が付けられている。歯科医師にとって、こんな有りがたいことはない。あの膨大な全集を繙くことなく、勞せずしてパレの歯科口腔病医学を一読できるのである。折しもパレ没後四〇〇年に発刊されたが、この訳業は数年前から『日本歯科医史学会誌』に連載されてきた。訳注者としては、既定の上梓であつたらう。

このように関連領域において寄与している英才がいることを、医史学会の方々にも知っていただきたい。

(中原 泉)

[デンタルフォーラム 一九九〇年 A五判 九〇頁
定価三、〇九〇円]

Sumao Tawara 著、須磨幸蔵ほか訳

『哺乳動物心臓の刺激伝導系——房室束とPurkinje線維の解剖学的・組織学的研究』

心臓の運動をつかさどる刺激伝導系——これは田原の命名にかかるとの一部分に、房室結節がある。近ごろでは解剖学名に人名をふすことを意識的にさける傾向があるが、以前はこれを田原結節、あるいはアッシュョッフ・田原結節と記憶していたはずである。

これを発見した田原淳が、医学史上不当とも思える扱いしかうけていないのは、おおくの医学史書にみられるところである。さきにわれわれが翻訳したシンガーとアンダーウッドの通史では、刺激伝導系の発見者としてアーサー・キースやマーチン・フラックの業績が正しく評価されているにもかかわらず、田原はその名さえみられない。原著の復刻版の出版も翻訳書の発刊も、すべてはここから出発しているのではないかと考えられる。

その田原が、ヒト、イヌ、ネコ、ヒツジ、仔ウシなどの哺乳動物について、房室連結束の走行や組織学的所見を、正確かつ詳細に記載した約二百ページにもおよぶ原著 *Das Reizleitungssystem des Säugtierherzens* (1906) を、イェナのグスタフ・フィッシャー社から独文で刊行した。それから九〇年近くたった一九九〇年に翻訳出版されたのが本書である。訳者は心臓血管外科医(須磨幸蔵東京女子医大教授と島田宗洋国立小児病院医長)と解剖学者(島田達生大分医大助教授)である。

およそ一五年前、はじめて原著に接した訳者達は、偉大な先人

の輝しい業績を十分理解していない自責の念にかられて、原著の復刻の出版を完成したが、その後にはたつて翻訳の決心をかためた。近ごろの日本の医師にとつてドイツ語はなじみの言語ではなくなつてしまつたため、刺激伝導系発見の事蹟をひろく知つてもらうためには、復刻版の出版だけではその目的を十分はたせないことをさとして、邦訳を計画したという。

本書は題名のしめすとおり、哺乳動物心臓の刺激伝導系についての詳細な研究であるが、とくに房室束とプルキンエ線維についての解剖学的・組織学的研究が中心の主題である。

現在の解剖学や生理学の教えるところによると、刺激伝導系は洞房結節、結節間心房内伝導路、房室結節、ヒス束とその分枝、プルキンエ線維よりなる。おもしろいことに、ペースメーカーとしての洞房結節の発見がもっとも新しく——これはキースとフラックによつて一九〇七年に報告された。原著の刊行の翌年である——最後に興奮が到達するプルキンエ線維の存在がみとめられたのがもっとも古い。一八三九年ヨハネス・プルキンエによつて発見されたこの線維が、心臓の機能とどう関係しているかについては、プルキンエ自身は認識していなかつた。その後おおくの学者——田原によれば、その数は二六名以上にもおよぶという——が、その解明にむけて努力をほらいながらも解決をみていなかつた。田原がその解明に情熱をかたむけたのも、故なしとしない。

もう一つの柱である房室束の研究は、本書の大部分をしめる、まさに中心的テーマというにふさわしい。それぞれの研究史や学説史についてもページをさいており、自己のおかれてゐる立場を

認識する手段としての史的展望の重要性を強調している有様をよみとることができぬ。

ちなみに本書の目次に目をとすと、

B 房室束の研究史

B 研究結果

I 房室連結系の局所解剖

- a イヌ心臓の房室連結系
- b ヒト心臓の房室連結系
- c ネコ心臓の房室連結系
- d ヒツジ心臓の房室連結系
- e 仔ウシ心臓の房室連結系

II 房室連結系の組織学

- a ヒツジ心臓の連結系
- b イヌ心臓の連結系
- c ヒト心臓の連結系
- d ウサギ心臓の連結系
- e ラット心臓の連結系
- f モルモット心臓の連結系
- g ハト心臓の連結系

C 考察

I Purkinje 線維についての学説の発展

II 房室連結系の生理学的機能に関する著者の仮説

D 結果の要約

E 動物の房室連結系切離実験の指針

「D 結果の要約」の章には、田原自身がまとめた研究結果が箇条書きに示されている。

一 プルキンエ線維またはそれと同様の機能をもった組織が、ヒト、イヌ、ネコなどの哺乳動物や鳥類に存在する。

二 心房筋と心室筋を連結する組織、ヒス束などの筋線維系の終末組織はプルキンエ線維である。

三 この連結系は心房中隔を起始部とし、房室線維中隔を穿通し、心室壁各部位の終末展開枝までも、常に結合組織によって固有心筋から隔離され、筋束として走行する。筋束は長い走行中どの部位でも心筋と結合することなく、終末展開部となつてはじめて固有心室筋と結合する。

四 連結系はヒトでは胎生の比較的早期に形成され、それ以後は成長による増量をのぞけば、全生涯にわたり変化しない。

五 連結系の特性は、この系で刺激伝導がおこなわれ、またこの系が心房心室の協調的収縮を支配する。

本書の末尾には訳者による解説として、田原の経歴と刺激伝導系発見にいたる研究歴が記載されて、読者の理解に資するところをおおきいものがある。さらにくわしい知識をもとめたい者のために、文献をかかげて便宜をはかっているのも、ゆきとどいた配慮といふべきであらう。

医学の歴史に燦然とかがやく刺激伝導系の発見をつげる原著を、翻訳によって容易にのみうるようになった。医学研究の基礎的素材の一つがくわえられたことよつて、医学界への貢献はきわめておおきいといえよう。

〔丸善 一九九〇年 A五判 一九五頁 定価八、二四〇円〕
(深瀬 泰且)